

大連医科大学への留学について

2019年6月17日から28日の2週間、中華人民共和国大連市の大連医科大学へ臨床実習目的で行きました。その報告をいたします。

・ 留学をしようと思った理由

私は海外が好きだ。いろいろな文化、様々な価値観、習慣。自分と違う生活をする人たちがそこにはいて、楽しそうに暮らしている。そんな光景を見るのが好きだ。しかし、生まれた国が違うというだけで、受けることのできる医療のレベルには大きな差がある。私はそれに違和感を感じる。まだ、それに対する解決策や自分が何をしたいのかが明確にはわからない。そんな中、自分の目で見て学ぶことのできる海外研修は非常に貴重な機会だと思った。

・ 大連医科大学を選んだ理由

発展をし続けている中国に行きたかった。毎日のようにテレビのニュースで流れてくるのに、中国という国のことをまるで知らなかった。自分の目で見てみたかった。また、大連市は日露戦争の戦場となり、戦後は日本に租借権が譲渡されるという歴史を持つ都市だ。日本人に対してどのような感情を持っているのかというのは気になる場所であった。



高台から見た大連市



夜の大连

・ 留学先で学んだこと

実習は産婦人科で行った。医療設備、診療システム、プライバシー。全てが日本とはまるで違っていた。産婦人科の外来は男子禁制。自身のカルテを持った患者が診療開始前から大勢集まり、診察室には家族以外の人も入室する。多い時には13人もの人がすぐ隣で他人の問診を聞いている。診察室の奥には内診台があり、医師は数人の内診を次々に行う。ここには日本のような自動内診台や目隠しのカーテンなどはない。自身で台の上に入り、採取した検体は患者の手で検査部へと運ばれる。一方、手術は日本と大きく変わったところはないように感じた。少し古びた病棟の中で、産科病棟だけが、飛び抜けて綺麗だったのは中国が一人っ子政策をしていたからだろうか。

休日には大連医科大学の学生が市内観光に連れ出してくれた。動物園に行き、パンダを見た。夜には大規模な噴水のショーがあった。また、学生のみんなどはとても親しみやすく、日本と中国の違いや自分たちの学生生活についてたくさん話した。小籠包とタピオカミルクティーと大連名産のさくらんぼをたくさん食べた。

ひとり、忘れることのできない患者がいるのでそのことを記したい。実習の最終日に会った彼女は、妊娠40週の妊婦。なんと日本に留学していたようで、戸惑っていた私に優しく話しかけてくれた。彼女の分娩はなかなか進まず、帝王切開となった。手術室に移り、そろそろ手術を開始しようかというその時、突然彼女が痙攣し始めた。手術室は騒然となり、私はただただ見守るのみ。迅速な処置のもと帝王切開がなされ、子供は産声をあげた。術後先生が説明してくれたのは、出産が長引き疲れたこともあって、てんかんが起こったのではないかということだった。今は麻酔が覚めるのを待っているところだから彼女は大丈夫だよ。先生は優しくそう言ってくれた。中国だから経験できた、ということではないかもしれない。けれど、私はこの時、医師になろう、医師になりたい、と強く思った。生と死は隣り合わせなのだということを、身をもって体験した。いつかどこかでまた彼女に会えたらいいなと思う。



実習でお世話になった産婦人科のドクター達と



大連医科大学の学生との昼食



毎日行われる噴水ショー



道端でさくらんぼを販売

・ 留学先で感じたこと

私の中で中国は近くて遠い国だった。今回留学をして歓迎してもらったこと、友達ができたと、また、学生という立場で留学させてもらえたことはかけがえのない経験であった。中国の人は優しい。日本を好きでいてくれる人もたくさんいる。そんな印象を持つようになった。

2週間は短い。たくさんの人にそう言われたし、私自身そう思う。医学的な知識を学び、持って帰るには短すぎる。しかし、ここで自分が考えたこと、感じたことは知識以上の価値がある。今後の我々の人生に2週間だったとは思えないほど大きなものとして返ってくると思うし、そうなるように日々を過ごしたい。

・ 最後に

今回の留学にご支援とご尽力くださいました、先生方、国際推進室の皆様、医学部同窓会の皆様に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

